

## 第 8 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2008 in 金沢を振り返って

プログラム委員長 野村守弘  
(近畿大学医学部附属病院臨床試験管理センター)

2008 年 10 月 11 日と 12 日の両日、第 8 回会議が古川裕之会議代表のもとに金沢の地で開催されました。天候は晴れ、少々汗ばむ気温ではありましたが屋外は適度に風が吹いて過ごしやすい天候でした。会場の石川県立音楽堂の中は大きく、教育講演・シンポジウム会場では十分な席を確保できていたので環境的にはほぼ言うことなしでしたが、ポスター発表会場についてはピーク時は人だかりで身動きしにくかったり、ミニシンポジウムに予想以上に人が集まり過ぎて椅子の調達で翻弄するような場面もありました。これもこの「あり方会議」の参加者の活性化の印でもあり、うれしい悲鳴と言えるでしょう。この 2 日間で金沢という地方（あくまで都心から見た場合です）で 2300 人くらいの関係者が集まりましたので、治験・臨床試験という医学・医療への貢献だけでなく、かなりの経済効果への貢献もありました。色々な意味で有意義な大会（あえてこう言います）だったことには間違いありません。

今回の会議では、国際共同治験、EDC など比較的新しいテーマだけでなく適正な業務分担など CRC 業務が始まって以来のテーマも設定し、新 GCP 発足 10 年の節目を迎えて種々の題材に取り組むことにいたしました。教育講演やシンポジウムについては企画から実行に至るまで、プログラム委員が責任をもって分担運営いたしました。また、金沢市アートホールにおきましては、CRC 連絡協議会と SMO 協会からセッションを開催いただき、本会議を盛り上げる重要な役割を担っていただいた次第です。目玉企画としてプログラム委員が力を入れたのは、大会参加者が討論に参加できる本当の意味での“参加型会議”のできるシンポジウムを企画すること—— 従来の会議とは一味違う、研究発表者の中からシンポジストを選び、発表者と聴衆が同じ目線で手の届く距離で討論できるもの——でした。具体的には、CRC 業務上の工夫、業務分担、教育・啓発、治験事務局・IRB、治験の電子化そして本会議の中心軸に置いた国際共同治験をテーマに研究発表シンポジストを選び出し、数十人規模でシンポジウム（ミニシンポジウム）を行って議論に華を咲かせることです。結果は、会場スタッフが予想以上に人が集まり過ぎたために椅子を用意することに奔走しなければならなかったこと以外、プログラム委員が自信をもって推薦した新進気鋭の座長の方々に持ち前の統制力を発揮いただいて、時間いっぱい活発なシンポジウムを展開できました。

ポスター発表も約 200 演題（うちミニシンポジウムとしては 32 演題）にのぼり、治験・臨床研究に係る人々の関心の高さと業務への真摯な取り組みの現れと言っても過言ではありません。ただ、前年の第 7 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議ではシンポジウムテーマとして大々的に展開されたテーマであるがん・精神・小児という専門性の高い分野の CRC 業務についての発表が極めて少なかったことが意外でした。ある意味、本会議はがん学会や精神病学会など疾患専門性の高い学会とは異なり、CRC 業務というものに直接関連する事項を展開する場であるとの認識が根底にあるのか、それとも未だ高度の疾患専門性を掲げるだけの CRC 業務が根付いていないせいなのか、現段階では何とも言い難く、今後の展開に注目したいところであります。

各シンポジウムも大方は盛況で、それぞれのシンポジストのすばらしさ以上にそれを企画したプログラム委員の方々の努力に負うところが大きく、手前味噌ながら非常にすばらしい委員の方々に支えられて本会議のプログラミングを進めることができたことは、プログラム委員長として望外の幸せでありました。また、微に入り細に入り大会全体と After 5 を仕切っていただいた古川裕之会議代表、諸雑務を一手に担当いただいた金沢大学の方々、本会議準備が開始される当初から見守り困ったときの相談役として控えていただいた神谷晃第 4 回会議代表、煩雑な手配・諸手続き等を担当いただいたメディカル東友の方々など関連各位に対し、この場をお借りして深謝いたします。